

事例番号 13

Keywords: 重度知的障害, 現場実習, 意思表出, 伝えようとする意欲, 携帯ブック, 障害に基づく困難の改善

(1) 重度知的障害の生徒に対して、コミュニケーションブックを活用してコミュニケーションの相手を広げてきた実践

(2) 事例の対象となる児童生徒について

高等部3年 男子 知的障害 自閉症

田中ビネー知能検査: 算出不能 (IQ 9 参考値) S-M 社会生活能力検査: SQ21

重度の知的障害である。言語理解については日常よく体験したり見聞きしたりする内容以外は理解が低い。言語理解より視覚による理解が高い。表出言語はないが、相手に自分の思いを伝えようとする気持ちは強い。

(3) 使用する機器 (支援機器) 名称と特長

① 支援機器の名称

コミュニケーションブック (PCS シンボル, デジカメ写真, その他絵カード)

② 特長

PCS シンボルのカードや写真カードなどを使って「あいさつ」や「感情」「人」「場所」「好きな物」などのカテゴリーについて、対象児童生徒に応じて作ることができること、また、システム手帳サイズにすることで、日常携帯しやすいことが特長である。



図 4-13-1

コミュニケーションブック

(4) 使用した機器を選定した理由

対象生徒は、表出言語はないもののコミュニケーション意欲は高く、幼少期にはジェスチャーやクレーンなどで相手に思いを伝えていた。コミュニケーションブックは小学部から使い始め、学校や家庭では特定の人に対してコミュニケーションブックを使って指さしで自分の要求や意思を伝えることができるようになっており、現在は使いこなしている。学校卒業を控え、将来の地域生活や職業生活においても、特定の人だけでなく新しくかかわる人に対しても主体的に相手とのコミュニケーションを広げていけるようになってほしいと考え、これまで使用してきたものを継続して選定した。

使用するカードは PCS シンボルを中心に構成している。「人」のカテゴリーは写真カードを用いるが、「あいさつ」「感情」「場所」「好きな物」などのカテゴリーは、PCS シンボルを中心に作成した。PCS シンボルは、他のシンボルと比較して種類が多いこと、写真と比較して背景などの不必要な情報が入らずにシンプルであること、本校生徒にとっては小学部段階から VOCAなどで PCS シンボルに慣れ親しんでいることから選定した。

(5) 選定のプロセス

コミュニケーションの相手を広げるという観点から、これまでに使用してきたコミュニケーションブックを継続して使用する。それを使って、学習のなかでヘルパー役の学生や外部の方など日頃かかわりの少ない人に対して使う場を設定する。また、就労に向けた現場実習においても、コミュニケーションブックに必要な内容を追加して使用する。その際に、現場実習先の直接かかわる人からの情報を基に相談しながら内容を検討する。

(6) 個別の指導計画と個別の教育支援計画

本校では、個別の指導計画を「個別の共動支援計画」と呼び、保護者と共に目標の設定、評価を行うようにしている。また、本校高等部では、「仕事」「生活」「余暇」の三つの領域に分けて教育課程を編成している。

平成 21 年度後期の個別の共動支援計画（個別の指導計画）において、「生活」領域の学校設定教科「暮らし」の目標として以下の内容を計画した。

目 標	慣れていない人に対してでも、コミュニケーションブックを使って自分の思いを伝えようとするができる。
手立て	いつも一緒に活動する教師に代わって、ヘルパー役の学生や外部の人と活動を行い、必要な場面で要求や報告が出せるようにする。

学校においてだけでなく、より実際場面においても相手意識をもって使用できるようにするために、学校外の活動においても広げることにした。

そこで、平成 22 年度後期の個別の共動支援計画（個別の指導計画）において、「仕事」領域の「現場実習」の目標として以下の内容を計画した。

目 標	現場実習先の人に、コミュニケーションブックを使って作業の報告やトイレなどの要求を伝えることができる。
手立て	現場実習用のカードを追加し、最初は教師が入って要求や報告を行い、実習先の方と役割を交替して必要な要求や報告が出せるようにする。

(7) 指導の内容

学校での日常生活場面では、高等部入学時にはすでにコミュニケーションブックを使いこなしていたが、「トイレ」「DVD」など、自分がしたいことを表すカードのみを指さしていた。そこで、要求場面では、相手意識をもたせるために、「〇〇先生（誰）」「〇〇を（何を）」「お願いします（どうする）」などと三つのカードを選んで 3 語文で伝えるようにしている。

学校設定教科「暮らし」においては、将来の生活に必要な力を身に付けるために家事全般について学習している。平成 21 年度の実践においては、困ったときに誰にでも助けを求められるように、ヘルパー役として定期的に大学生や外部の方に授業に入っていただいた。その場面で、困った場面を意図的に設定したり、活動が終わったときに報告したりする場面を設定した。教師は離れた場所で見ている、必要に応じてプロンプトを示したりした。

卒業後の就労に向けた現場実習は、前期に 2 週間、後期に 4 週間学校外に出て行われる。3 年生は教師が常時指導に付かず巡回指導になるため、実習先の方とのコミュニケーションがより大切になる。これまでは、VOCA を使って報告したり、コミュニケーションブックとは別のカードを準備したりしていたが、今回は普段使っているコミュニケーションブックに実習先の施設や人の写真を追加して使うことにした。対象生徒は、新しい場面や新しい人に対してはコミュニケーションブックを使わずにジェスチャーで表現することが多い。そこで、最初は教師が入って実習先



図 4-13-2 ヘルパー役への要求場面



図 4-13-3 実習先の支援者への要求場面 1

の支援者の写真指さしながらプロンプトを示し、その後役割を交替して支援者からの声かけで要求、報告をする練習を行った。実習前半は、声かけがないとジェスチャーや直接行動で示していたが、実習後半になり伝える相手分かると、作業終了の報告やトイレの要求等の際に、自分から支援者に対してコミュニケーションブックを使って伝えることができるようになった。



図 4-13-4 実習先の支援者への要求場面 2

(8) 支援機器の使用効果あるいは、指導の効果と支援機器の評価

学校設定教科「暮らし」での実践においては、ヘルパー役の方と事前に打ち合わせをして学校における使い方を共通理解しておいたことでタイミング良く声かけをしていただいたこともあり、最初何回か教師がプロンプトを示したものの、自分から主体的に報告や要求ができるようになってきた。同じ人と何回か活動をするようにしたことで相手に対する意識も高まったのではないかと思われる。

現場実習先での実践では、前期と同じ実習先であったため、環境に慣れてきていることや指導員の全面的な協力もあり、4週間の実習期間中に100%の確率で指導員に対してコミュニケーションブックでの報告や要求ができるようになった。

以上の二つの実践をとおして、コミュニケーションの相手を広げるというねらいに対して成果が見られた。その要因として、これまで使用してきたコミュニケーションブックを継続して使用したことで、相手は変わっても抵抗なくコミュニケーションの手段として使用することができたと思われる。また、コミュニケーションブックの特長にも挙げたように、常に携帯できることで、必要なときにすぐに使えるという点でも効果がすぐに現れた一因であると考えられる。

(9) まとめと今後の課題

コミュニケーションブックは、表出言語のない児童生徒にとってコミュニケーションの代替手段として有効な道具である。知的に重度であっても、シンボルや写真、絵を用いるので視覚的に理解しやすい。また、小さくて携帯するのに便利であり、内容も必要に応じて簡単に変更したり追加したりできる点で優れている。しかし、誰にとっても有効であるとは限らず、本校でもなかなか有効に使いこなせない児童生徒が多いのが実情である。今回の対象生徒は、自分の意思を伝えたいという意欲が高く、相手意識も高いため効果が出た事例である。

また、コミュニケーションを行うには相手がいるので、コミュニケーションブックを使う側の一方的な意欲だけでは成立しない。学校を卒業して社会に出ると、新しい環境のなかで新しい人とかかわりながらコミュニケーションを図らなくてはならない。本人はもちろん、本人とかかわる相手に対しても理解が深まるように支援を移行していくことが大切になってくると思われる。将来の社会生活や職業生活において、主体的に参加して豊かな生活をおくるためにも、コミュニケーションブックという媒体を使って、今後もコミュニケーションできる相手を広げていく機会を設けていきたい。

(10) 文献（引用文献・参考文献）

武蔵博文・高畑庄蔵(2006)．発達障害のある子とお母さん・先生のための思いっきり支援ツールーポジティブにいこう！.エンパワメント研究所，94-109.

本事例への付加情報

(以下は、研究協議会における本事例に関する質疑の内容である。活用事例を理解する上で注意が必要と思われた場合や、児童生徒の実態について補足が必要と思われたケースについて、実際の指導の様子を理解するために、基本的に録音した会議記録を書き起こしたものである。)

追加情報 1

高等部の重度の知的障害で自閉症の生徒に対してコミュニケーションブックを使った事例です。コミュニケーションブック自体をこの生徒は小学部から使っていてかなり使いこなしているということで、特定の担任の先生や特定の人にしか使っていなかったのを、高3ということで、社会に出るに当たって、誰にでも使えるようにコミュニケーションの相手を広げていこうという事例です。ブック自体は、よく使われているものと変わらないと思います。ただ、人とかはもちろん写真を使っていますが、シンボルについては PCS シンボルを中心に使っています。

慣れていない人にブックを使って伝えるということで、授業の中では、附属なので大学生にヘルパー役になって授業に入っていて、その学生に対して要求を出すとか。もう一つは、ごく最近、このあいだ終わったところですが、現場実習という職場での実習のときに、職場の実習先の方とも打ち合わせをして実習バージョンのブックをつかって、先生がいても先生ではなく実習の指導員さんに自分から要求を出すという形で、実際に4週間の実習の中で最後には、自分から指導員さんに対して示すこともできるようになってきています。そういう形で、社会に出てもブックはいろいろな人に活用できるようにしていきたいと考えてやっている事例です。

質問 1

事例のコミュニケーションブックですが、実習でコミュニケーションブックをつくったという話をされていましたが、その場その場に応じたコミュニケーションブックを使ったほうがいいのか、その子がずっと一日中同じ一つのコミュニケーションブックを使ったほうが使いやすいのか。例えば、職場に行くときは職場用のコミュニケーションブックを持っていくのだという形にしたほうがいいのか、その辺は少し分かりにくかったので、話を聞かせてもらえないでしょうか。

回答 1

基本的には、1冊がだんだんと分厚くなっていくということもあるのですが、同じものを使っていければと思っています。実習については、今回、広げるということで初めてそれを使うことになったので、それで行くのもできるかと思ったのですが、中に入っているものとも同じものも使いながら、相手の顔写真だけを替えたのです。それを1枚ものにして、今までどおりのもも入れて、それにその1枚のものを外に、もう1枚だけ今回付け足したのですが、ゆくゆくはそのような1冊の、常に持ち歩くものと同じものにしたいと思っています。今回それを実習先の方にも使っていただくのに、ページが多いと分かりにくいかと思って、そういうものを特別につくりました。

関連したコメント

日ごろ使い慣れたコミュニケーションブックということで、昔、私がそばまで行くと、彼は突然ページを開いて私の写真を指さして「さよなら」と言いました。このように「おまえはもう、あっちへ行け」というようなことにも使っていたりするので、かなり使い慣れている例です。本当にびっくりするタイプの子もさんだと思います。本当に障害の重い子どもさんです。

が、自分でぺらぺらとめくって、人と行動を組み合わせるのですが、そこにある名詞や動詞はかなり理解されている方です。だから初めて読む人に、そういうイメージがわくように伝えられたらいいのではないかと。日ごろ使い慣れたというところだけで終わると、恐らくイメージがわきにくいかと思います。

以上

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校におけるアシスティブ・テクノロジーの活用ケースブック－４９例の活用事例を中心に学ぶ導入、個別の指導計画、そして評価の方法－」（2012/3）に記載された内容である。